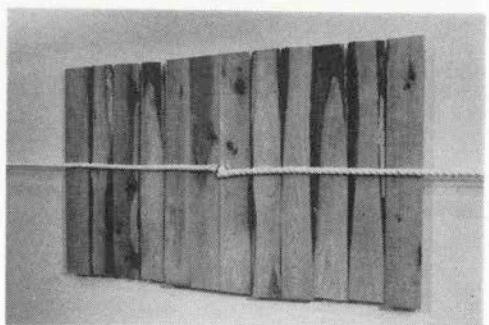


隨想



作品／足立 幸久

「黄色い爆弾」のこと

服部 洋介

（高校教師）



表題作『黄色い爆弾』は模造ウ

ンコのことで、糞尿の話を集めた『スカトロジア』の著者の山田稔さんの推せんではじめてVIKING

NGに掲載された小説である。大学時代に仲間と出していた『邦村』という同人誌に載せた『悪戯』、神戸市民文芸集『ともづな』に載

せた『白い夏』、VIKINGに載せた『猫の首』、『俺は独活』、『薄氷を踏む』の六編を集めた第一作品集である。小説を書く上で二つのことが私は支えている。一つは先天性内斜視で生まれ、何度も入院と手術をくり返したあげく右眼が失明、同然になつたこと。しかも、失明しきねた、かすかに見える右眼の像とはつきり見える左眼の像が一つに重ならず二つにぶつて見えるのだ。空想力でおぎなわねば何だかわからぬいわば虚像と、はつきりと見える、いわば実像とがいつも目の前にある。眞実は一つではないという抽象的な概念が、私は具体的な事実なのだ。もう一つは

乗っ取れ感覚。大学紛争は戦後世代にとって大きな試練であり挫折体験であつたろうが、テレビで安田講堂事件をながめながら、今に俺もと思っているうちに安保も全共闘もどこかに行ってしまい、私が大学に入った時にはセクト同士の内ゲバと爆弾テロの時代になっていた。高度成長にしたつて大学さえ出ればどんな職につけると思つていたのが卒業寸前のオイル・ショック。そして戦後最大の就職難。損をしたのか得をしたのかわからぬが少しずつ様々な出来事から遅れたために、オーバーな言い方をすれば「歴史的」に自分をとらえる術を見失ってしまった。

中味が空っぽで、それでいて自分が一步も出られないのだ。この二つのことが私に小説を書かせている気がする。

本というのは処女出版というくらいだから性別は女なのだろう。女である本を作るのは男の仕事などとばかりたことを言うつもり



はないが、自分の中に書くべきものがある限り書き続けるつもりだ

作品を活字にすると作者の手を離れると言うが、両親が別居した少年を主人公にすると服部洋介の両親の不和が取りざたされたり、女学校教師の主人公が元教え子と結ばれると現実の女学校教師服部洋介が免職の危機に陥ったり、猫殺しの少年を書けば、愛猫家からしかられたりする。作者の手を離れるどころか、作者そのものがどこに行ってしまった気分である。

「黄色い爆弾」は梶井基次郎の「檸檬」のパロディーであり、帶は「ちんびら・れもん」の藤本義一さんであり、出版社は檸檬社と、レモンづくしの処女出版である。

富士正晴さんは私のことを序文で「大胆で：いくらでも小説を生産する」と言っているが、そんなには書けない。でも、書きたい気だけは、いつもある。

★黄色い爆弾
檸檬社発行
書店でも発売中ですが、ない場合は神戸市灘区青谷町三丁四一八、服部洋介（送料二五〇円）まで御一報下さい。

閉めきが 陽か、陰か 足立 幸久

（造形作家）

九月に大阪の鞠ギャラリーで個展を開いたのですが、今回の自分の作品について気付いたことを少

し書こうと思います。

今回に限らないことですが、自分で作った作品に納得出来るものが出来たか、どうか。私はいつもそうなのですが、会期前ギリギリまでプランを温めるという癖がありまして、その上、私の作品はどちらかというと、現場での作業が主に成るようなところがあり、ましてコツコツと仕上げるタイプではないようです。だからと言つて作品を好い加減に制作している訳では、決してありません。念のために。でも……やはり好い加減かな。

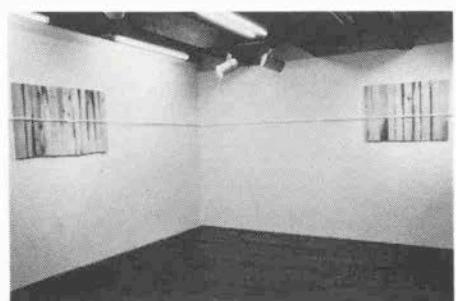
決して好い加減に出来上がってない作品について、一言。

私の作品は、閉めきの上に成立していると常々、思っています。作品に何を求めているのかよく分りません。でも、一つはつきりいえるのは、その作品が私にとっておもしろいか、おもしろくないか、ということです。このおもしろい、おもしろくない、という私だけの言葉（基準といってよい）で、私は今までの作品を作り、見て来たのです。そしてこの言葉が、私の作品の中においての方向性と成っていくものです。

もう少しわざとこの言葉（私自身の基準）について話をする

と表われればおもしろくないとなるのです。作品を制作する時にこれららの基準が、陽となり、陰となつて、私の中で、考えとなる以前に頭に閉めくのです。私の作品が閉めきの上に成立しているたのは、こういうことなのです。

だから、私は各作品について閉めたことを考え、陽か陰か、おもしろいかおもしろくないかを考えたのは、こういうことなのです。



鞠ギャラリーで開かれた個展で

えるのです。作品を前にして考えるのですから、しんどい作業です。

私の言葉(基準)を解きほぐす、いつ解けるのか見当もつきません。

とにかく作品(といえるかどうか)は出来て、自分の前から消えてい

る物が大半ですから。

閃めいて作り、作って考え、考えて解き、解いて又、考える。作品に何かを求めるにすれば、この辺りだと私は思っています。

チユーリッヒに

大岡 雅一

(フルーティスト)

十年ひと昔と言いますが、日本の町並だけに聞いてももう五年ひと昔といつて良い程の変り方だと思います。神戸も他の都市に比べ、それ以上の発展が町のあちこちに見られ、山々の中腹まで住宅が這い上がり、海にいたっては、昔六甲山頂より見下して海外以外の何もの無かつた所に、忽然と人工島



フルートを奏でる大岡さん

が出来、私が日本を離れた十五年前との違いに驚きました。ある知人から「浦島太郎になつたような気がするやろ」といわれましたが、帰国後の三ヶ月間を振り返り、全

く当を得た言い方だと思います。

二ヶ月のつもりのイスラエル滞在が今までの私の人生の約半分を、イスラエルもチューリッヒ音楽大学に居座つてしましました。最初の五年間を過ごした「国際学生の家」には、世界各国からの学生が二十人程住み、皆「遠く故郷を離れて」という心境から連帯感が生まれ、今から振り返つてみても、一番思い出深い時期ではなかつたかと思います。学生の家を出た後も同じ仲間がよく集まり、後の十年間に私にとっては、彼等の存在がいろんな面でプラスになりました。

五年目を過ぎますと、最初の留学というある一つの目的の為にチューリッヒにいるというより、木根がつくようここに住んでいり、生活をしている、という感覚はつきりとし始め、アルバイトも勉強になるという意味だけでなく「仕事」と生活の中心になってきました。いろいろな仕事の中でもヨーロッパ人の生活に切つても切り離せない教会での演奏が、私にとって目新しく興味深いものでした。チューリッヒにはカトリック

とプロテスタントの教会が半々程度ですが、音楽会が催されたり、日頃の牧師さんの説教の合間に音楽が入るのはカトリック教会の方が多く、曲目もプロテスタント教会では思い切った現代音楽等も取り入れますが、カトリック教会では主にバロック時代の曲が演奏されます。先程ヨーロッパ人にとって切つても切り離せない教会と書きましたが、この十年間私にとっても同じようなことがいえます。

あるカトリック教会の常任フルーティストとしての、あるいは他の教会から頼まれての演奏の場合、牧師さん、オルガニスト、と私の三人が教会の行事の種類によって曲目を決めますが、私的な行事、結婚式、等の場合当事者の希望があります。一般の人達の日常の会話にバッハ、あるいはヘンデルの何々、と出るのをじかに体験し、今さらながら特にバロック音楽の普及にとつて教会の果す役割の大さきをしみじみ感じました。

落ち葉が舞い、各地で多くの音楽会が催される今日の頃、音楽をじかに肌で聞くことの出来るこのチャンスに、時間の許す限り、多くの音楽会に足を運び、この十数年間の日本での空白を一日も早く埋めたいと思っていました。

*10月16日大阪厚生年金会館中ホールで開かれたランバールと日本のフルーティストによる名曲フルート協奏曲の夕べ』に国友重紀、遠藤和実氏と共に出演しました。

美しいご挨拶

自然の風味のユーハイム



ユーハイム

ユーハイムのマークが新しく生まれ変わりました。

おじい様おばあ様の世代からつづく
オリエンタルホテルの御婚礼

貴方でもう三代目

百余年の歴史がささえる真心と
サービスで、素晴らしい門出を……

オリエンタルホテル

〒650 神戸市中央区京町25

☎078(331)8111

兵庫野鳥の会

早川 守哉 △事務局▽

本会は昭和四十一年六月兵庫県の勧奨に基き設立され、野生鳥類の調査研究と鳥類愛護、自然保護精神の高揚をはかることを目的としています。

毎年県主催の野鳥バスの指導に当る外、毎月一、二回探鳥会を催し鳥類のみに限らず広く自然の観察研究の指導を行っています。

バードウォッチングは、生物学的理念を知ると共に、地球上に共存する生物として、鳥たちとの命の共感、自然との一体感を得します。それはドラマ「命燃ゆ」の丈吉の「一隅を照らす太か心」無欲



バードウォッチング中の小林桂助会長

とを目的とします

第三条 事業

一 野生鳥類の調査研究

二 野外観察会の開催

三 会報「鳥と自然」の発行

四 其他本会の目的達成に必要な事項

誠実な心であり、又その美学と論理と倫理の一体化こそ、ローレンツ行動学や今西進化学、河合猿學の根底にあるもので、病没の故湯川博士に尚世界平和への願いを燃え上らせたものあります。

会長は世界的鳥類学者で幾多の公的役職を持ち、著書も多く、行政及びジャーナリストに対し常時色々アドバイスされています。

会の調査研究としては、鳥類生息状況調査、鳥獣保護区の管理、各種環境アセスメントの鳥類部門

担当などであり、東中国山脈の天然記念物イヌワシの生態研究は学界で高く評価され、テレビで一般にも報道されている所です。

又季刊会報「鳥と自然」はその学術的価値により県外にも会員が増えています。

第七条 会計

会費と寄附金で賄い、毎年一月一日より十二月三十一日までに

ついて会計報告をします

附 則 会費は当分の間年一、〇〇〇円とします

(昭和五十二年三月二十七日改正)

役員

会長 神戸市灘区篠原北町一丁目一一三二 小林桂助

事務局長 伊丹市桜ヶ丘五一二

一五六四早川守哉方におきます

事務局委員 十五名

一六 坂根 干

会員 現在数四三〇名

会員は老若男女、職業は多種多様、生物学関係者に限らず、文学芸術の爱好者も多い。

この会は野生鳥類の研究と、その知識の普及、並に広く自然を観察し、自己開発の糧とするこ

□連載エッセイ／私のひろいもの△33▽

さくらもり

桜守の おきな

竹中

郁△詩人・絵も▽

笹部新太郎（ささべしんたろう）翁がこの世を去つて数年になる。その邸あとが神戸市に買われて公園になったというので見に行つた。

阪急岡本駅を降りて、西へ二百米ばかり、川すじへ出る。そこを右折して阪急ガードをくぐると、右手すぐがそこだ。三百坪くらいのこれといつて智恵のまとめを感じさせぬ庭だが、とにかく、一生を日本の桜のためにつくして私財を失った人を記念することは大いによい。

しかし、公園の名が「本山南」などと、いかにもあり来りの役所風で、近所の人がいやがつて「桜守公園」にでもしてくれと陳情しているそうだ。いっそ、そのものずばり、「ささべ公園」が一番わかりよくて覚えやすい。

あの有名な御母衣ダムの何百年もの老樹を、水没から助けて成功したことはもう忘れている人が

桜の幹ににこやかにもたれている笹部翁の姿をうまくブロンズの浮彫にでもして記念できればいいが、そもそもいまいから、ひとつ御母衣の名木

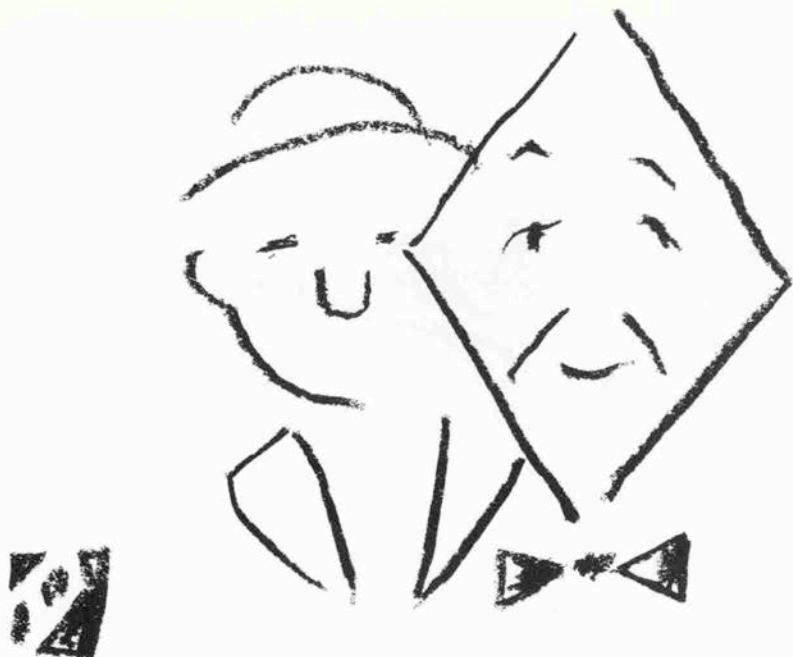
多い。その人たちの記憶を呼びますための記録と「ささべ」という名をとどめさえすれば、この公園の役目は終る。

とにかく親からもらった龐大な財産を全部、さくらにつきこむなんて業はなみの人間にできることがではない。水上勉がその小説「桜守」にどう書いたか知らないが、この人をモデルにしてさぞかし気持のいいことだらけだつたろう。
 公園の石のこしかけで休んでいると、小学生が二、三人、ぐるりの斜面を走り回る。
 「この公園は走り回るためのものじゃない。しづかにさくらのことを考える公園なのだよ。」
 いうと、わかつたかして、すぐしづかになつた。



のひこばえをもらって育てて、この公園へ移植したら、いかがであろう。

それが育つて見事な花を咲かすようになつたから、岡本に名所がふえるだけでなく、全く桜にいのちをかけた人への民衆の謝意と尊敬との念が形をなす。神戸市民としても下手に記念碑を建立するよりもスマートな思いつきで、その木のある限り、その桜の影響をうける大人や子供がふえつづ



けるのはまちがない。

笛部さんのおくさんは梅子というて、日本の婦人ゴルファのはしりの一人だった。女房が梅の花、それで自らは桜の花にいのちをかけたというところがドラマチックで面白い。

武田尾の山を一まとめに買いつつ、その山の成育を見守ることを一生の仕事として、政治家でもない一個人がつらぬいたのには誰しもが感心する。

笛部さんが桜の木や花とえにしができなかつたら、その一生は平凡な大阪の堂島そだちの金持のノラムスコとして終つたにちがいない。

この小さな屋敷跡の公園に近所の人たちが「桜守公園」と名づけたがるねがいも、その近所の人たちが笹部さんの桜に依る転身ぶりに感動しているからのことには違いない。そうすれば、神戸市は笹部さん個人の栄誉を守るだけのための変更ではなく、市民の理解ある申し出を率直に受け入れるという善政をすること、これが民主主義というものだ。とわたくしは理解する。市会の議員さんたちも一肌ぬいで下されば、この申出案件がやすやすと成り立つことは目にみえている。

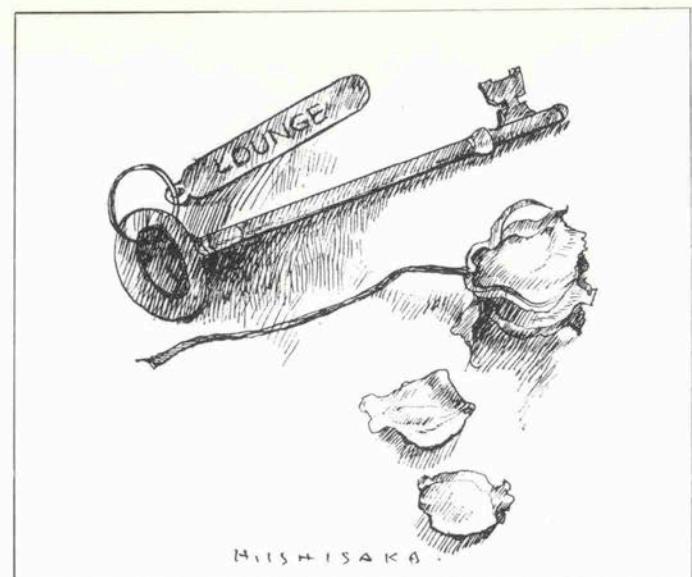
阪急六甲駅の北方約百メートルに、六甲登山口という大きな交差点がある。ちょっとと変形の五つ辻になっていて、その西南の角から二、三軒目に、「エクラン」という喫茶店がある。フランス語のしゃれた名前にもかかわらず、当節よほどの田舎へ行かなければお目にかかるないような古色蒼然たる茶店である。たたきの床の上に古ぼけたテーブルと椅子、片隅にはちょっと腰かけたりねこぶのに便利な狭い畳敷があり、夏ならばそこでは大きな扇風機がうなりを発しているし、冬ならばその煉炭火鉢のわきに肥えた猫がねそべっているという寸法。

この焼けた茶店に、大体二カ月に一度、休日の午後二時頃に集ってくる人たがある。「たうる

エクランに 集まる人たち

多田 知滿子詩人
/石阪 春生

連載エッセイ
折々の神戸（VII）



す」という同人誌のメンバーで、彼らはしかし一階の「洋風」の土間には席をとらずに、奥で靴をぬいで、ぎしぎしと踏板の鳴る狭い階段を登り、二階の座敷に車座になる。車座といつても、机をいくつかくつけたものに、ごく実用的なビルの覆いをかけて、ぐるりと長方形の座をしつらえてあり、同人は先着順に、好きな場所に坐るのである。こんな集会がもう四半世紀もついているのだが、このグループも、長い年月の間に二回、追悼号を出さねばならなかつた。長老格の同人越知保夫と二宮尊道とを失つたのである。

私が神戸に住むようになってすぐ入れていただいた頃、この同人誌は「クロオペス」と名乗つていた。「クロオペス」は「ヴァイキング」の中の外国文学者たちが分れて作った雑誌だというが、その辺の歴史には私は立ち会つていない。「クロオペス」が一旦解体して「たうろす」として発足してからでもすでに44号を出している。

目下「たうろす」の長老は仏文学の小島輝正（編集発行人）と独文学の小川正巳で、その次には一世代おいて、五十歳前後の数人がつづき、あと四十歳、三十歳、二十歳の学生まで、幅広い年齢層の同人を擁している。

このグループのよいところは、第一に、長老はいてもボスがないで、全く平等な文学共和国であることだろう。はじめは外国文学者が主流だったとしても、詩人や国文系の人々も次々加わって、今では、詩、評論、小説が仲よく紙面を三分している。どのジャンルが特に優遇されるということもなく、要するに作品がよければそれでよいのである。第二の美点は、文壇的俗臭の強い人物が皆

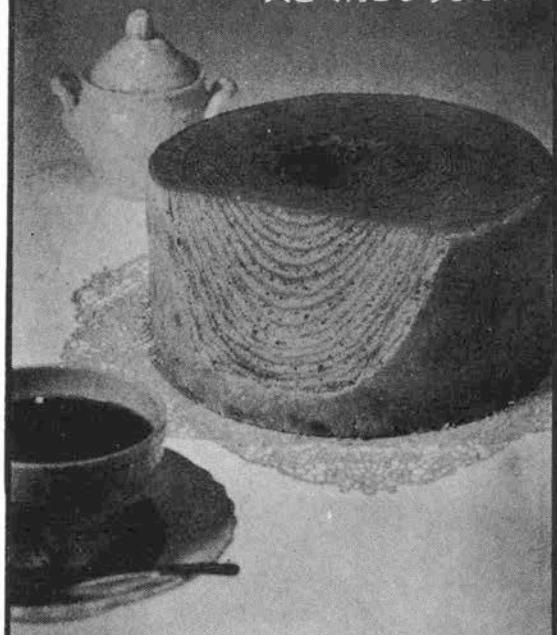
無なことだ。少々間の抜けた人間にも住みやすい環境なのである。だいたい、同人誌を足がかりにして文壇に打って出ようとなどという意気ごみの人は「たうろす」みたいなのんびりしたグループには絶対入つてこない。この長所を裏返せば、仲よしグループ的で生ぬるい、ということになろうが、しかし、有名になることや文壇に出る、ということは文学にとって本質的な問題でない、と同人ひとりひとりが合点しているらしいのである。

別に同人誌に拘らずとも、他にいくらでも発表の場をもつ人が多いのだけれども、そんな風に「一人前」だからという理由で「たうろす」をやめる人はいない。注文された文章でなく、自由に書きたいものが書けるのが同人誌の存在理由だろう。そういうわけで、古顔がいつまでも留年しているところへぼつぼつと新人生が入ってきて、大世帯になるかといえば決してそんなこともない。神戸を中心て大阪京都、遠くは山陰の米子、松江にも熱心な同人がいるが、それでも全部あわせて二十数人、ちょうどほどよい人数である。互いに何の利害関係もなく、ただ文学が好きというだけでさまざま人々が集つている。老若男女、学歴経歴一切不問のグループで、間口は至つて広い。資格はただ文学の一定の水準を心得ている、ということである。

雑誌「たうろす」の末尾には、編集後記とも味ちがう「たうろすの舌」という欄があつて、誰でもそこで言いたいことを言うようになつていて。たうろすはギリシャ語で牡牛の意だけれども、牡牛たちも結構よくしゃべる。長老たちをはじめ、男たちはみな心やさしいのである。

大きく育った 味の年輪

しあわせの年輪が
大きく育ちますように



バウムクーヘン ¥700～¥3,000

北欧の銘菓
ユーハイム・コンフェクト

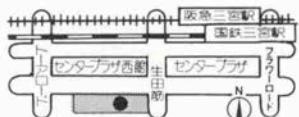
■本社・工場・熊内店 神戸市中央区熊内町1-8(南畠美術館東隣) TEL221-1164

ファッションに
“贅”を尽くすのは素敵。
でも、
いつも美しく着ている
人はもっと素敵。



技術に贅を尽くしファッションを
常に美しく——ニシジマ

- 型くずれの防止
- 素材感の回復
- カルテの作成
- お客様のお好みに合せた仕上
- ファッションクリエーティングの最新情報の提供



神戸市中央区三宮町2丁目10番号
グレイス神戸B1 (078) 332-2440

成人再考

秀三／国立民族学博物館助手

石森



腰布を織る女性。この腰布が成人女性のシンボルとなる

わたしは、ミクロネシアのサタワル島という小さなサンゴ礁の島で、約一年間にわたって、民族学的調査に従事した。島でくらしはじめ、すぐさまどいを感じたことがあった。それは服装の問題である。島では、男はフンドシ一本、女は腰布一枚で生活をしている。わたしもすぐに、フンドシを身につけた。しかし当初は、周囲の目が気になって落ちつかなかつた。それともうひとつ、女性が腰

布一枚でトップ・レスであり、これまた当初は目のやり場にこまつた。ところが、慣れとはおそろしいもので、やがて気にならなくなつた。

日がたつて、よく観察してみると、女の子供は腰布でなく、バナナの葉をさいてつくった腰みのをつけている。成人にならないと腰布をまとえないからである。この島では、初潮のおとずれをもつて社会的に成人と認定される。初潮という身体上の変化をもつて、子供から成人へと劇的に移行するわけである。それにともなつて、腰みのから腰布へと衣がかえられる。

日本では、年齢が二〇歳に達したときに、成人と認定される。しかし、成人の認定はきわめて形式的におこなわれ、法的な権利・義務に変化があるだけで、日常生活においてたいした変化が生じない。換言するならば、大人になる自覚なしに、形式的に大人にくみこまれていくわけである。その結果、いつまでたつても大人になりきれない大人がうまれることになる。大人の子供化である。その一方で若くして人生を悟つたと錯覚する大人的子供ができる。つまり、子供の大人化である。

このような大人と子供のとりちがえは、大人の社会的役割が明確に規定されているサタワル島では決しておこりえないことである。そこに、伝統社会に生きる人間のきびしいけじめを見るおもいがす

められる大人のことであり、当然のことながら、衣をかえるだけですむことではない。成人とみどめられたその日から、大人としてのふるまいが強制される。漁撈・カヌーづくり・畠仕事などの共同労働への参加はもちろんのこと、言